

# 公教育の接近と翻訳不可能なオルタナティブ —韓国・堤川ガンジー学校の事例から—

田村あすか

東京都立大学人文科学研究科社会行動学専攻（博士課程）

**概要：**本稿は、韓国の非認可オルタナティブスクール「堤川ガンジー学校」を事例に、公教育とオルタナティブ教育が接近する中でオルタナティブ教育が持ちうる意義を考察するものである。先行研究において韓国のオルタナティブスクール（現地語で代案学校）は「主流」に対置する存在とされ、異なる価値観を体現する教育モデルとされてきた。しかしながら近年の韓国では、公教育が試験の点数に限らない定性的な要素を評価する方向に進んでおり、代案教育と公教育の境界が曖昧になりつつある。このような状況において本稿では、堤川ガンジー学校が外部の視線による「監査」を拒みつつ、社会の主流的価値観に問いを投げかける「他者」としての意義を維持していると考察した。  
**キーワード：**オルタナティブ教育、監査文化、ホリスティック教育

## *Untranslatable Alternative Education* — Case Study of the Jecheon Gandhi School in South Korea —

**Asuka TAMURA**

Graduate School of Humanities, Department of Behavioral Social Sciences  
Tokyo Metropolitan University

**Abstract:** *This study investigates the significance of alternative education in the context of the growing qualitative orientation of public education, using the case of the unaccredited Jecheon Gandhi School in South Korea. Previous research has framed South Korean alternative schools as counterpoints to the mainstream system and as models embodying distinct educational values. In recent years, however, public education in Korea has increasingly shifted toward qualitative considerations beyond exam scores, resulting in a gradual blurring of the boundaries between alternative and public education. Within this context, this paper examines the role of Jecheon Gandhi School in preserving its identity as an 'other'—a critical stance that challenges mainstream societal values—while rejecting the external 'audit' imposed by those seeking to evaluate it through conventional frameworks.*

**Keywords:** *Alternative Education, Audit Cultures, Wholistic Education*

## はじめに

本稿では、韓国の非認可オルタナティブスクールである堤川ガンジー学校を事例に、公教育の定性化が進む社会においてオルタナティブ教育がどのような意義を持ちうるかを考察する<sup>1</sup>。ここでいう「定性化」とは、知識の定量的な評価や標準化ではなく、個人の主体性や多様な価値観、質的な学びを重視する方向へ教育が変化することを指す。

多くの国や地域において、公教育に先駆けて定性的な教育実践を展開し、公教育の対応しきれないニーズを補完してきたのがオルタナティブスクールである。これは政府の定めるカリキュラムとは異なる学習プログラムを実施する教育機関の総称であり、発展過程や形態は国や地域により異なる。本稿で取り上げる韓国の場合、その台頭の契機には、第一に画一的で大学入試偏重的な公教育に対する社会的な懐疑の高まりがあった。

韓国のオルタナティブ教育（以下、現地語に倣い「代案教育」と呼ぶ）が本格的に展開を始めたのは、1990年代である。この時期、韓国社会では青少年の自殺、非行、退学が急増し、深刻な社会問題となっていた。これらの問題を促す原因の一端として、公教育のあり方に対する批判が向けられ、特に過度な受験競争や成績至上主義が子どもたちに精神的な負担を与えているとの見方が社会的に強まった。こうした状況下で、一部の教育者や保護者により公教育の限界を打破し青少年の多様なニーズに応える新たな教育モデルを模索する動きが高まり、1990年代末には全日制の代案学校が登場するに至った。民衆による教育運動の盛栄と同時に、政府もオルタナティブな教育改革に踏み切り、1998年には全国から六校の代案学校を選定し「特性化高校」として認可・支援を開始した。その後も代案学校に関連する法整備は進み、現在では正規の学校教育の内外に跨る形で代案教育が存在している（鄭 2019）。

代案教育の台頭をもたらした大学入試偏重的な学校教育は、韓国の教育制度を取り巻く深刻な問題として長らく残存し現在も完全に解決してはいない。しかしながら、近年韓国の高校教育や受験体制は、試験の点数に表れない要素を積極的に評価しようとする定性化の方向へ進んでいる。言うなれば、これまで代案教育の担い手が行ってきたような教育実践が行政の側に採用されることで、オルタナティブであったものが主流の地位を取りつつあるのである。

公教育と代案教育が接近する状況において、代案教育の側は改めてアイデンティティを問われている。その問いに答えるため、本稿では正規の教育の外側にある代案学校の事例を手掛かりに考察を進めたい。

## 1.問題の所在

### 1.1.代案教育と「主流」の摩擦、その先へ

代案教育の黎明から30年ほど経過した今も、その実践は全国で展開され続けている。ただし、当初から問題視されていた大学入試をめぐる競争的な雰囲気は消失していない。

---

<sup>1</sup> 本稿は、東京都立大学人文科学研究科へ提出した修士論文の一部に大幅な加筆修正を加えたものである。

2023年度には小・中・高生を持つ家庭の私教育費総額が過去最高を記録しており（教育部 2024a）、大学入試の結果が未だ社会的に大きな意味を持つと推測される。

韓国で大学入試が重視される背景について、教育社会学分野で指摘されているのは、大学入試を富や地位の分配における公正で客観的な基準とする社会的認識である（cf. ウ・ミョンスク&ナム・ウンミョン 2021；パク・ギョン 2023；キム・ドンチュン 2022）。1997年のアジア通貨危機<sup>2</sup>以降メディアで強調されるようになった（パク・ギョン 2023）というこの大学入試への信奉を、キム・ドンチュン（2022）は「試験能力主義」と呼び、韓国特有のメリトクラシーと位置づけている。このように、一方では代案教育が発展し、他方では「試験能力主義」が根強く残るといふ交錯した状況が韓国社会では続いてきた。

したがって、代案教育の担い手にとって、大学入試偏重的な公教育は自分たちの実践の対極に位置するものとして存在してきた。実際、教育学を中心とする先行研究では、代案学校の在學生・卒業生が代案学校と一般学校、さらには代案学校と韓国社会全般を相容れない世界として認識していることが示されてきた（cf. イ・ウンシル&カン・ヨンテク 2011；ハム・ヨンジュ 2015；キム・ヨンファ 2014；チョ・ウジョン 2022；ユン・ビョンフン 2020）。例えばユン・ビョンフン（2020）は、調査した代案学校の生徒間で、学校内の教育や個人を「真正」、学校外の社会を「非真正」とする認識が共有されていたと記述している。また、代案学校の卒業生を対象とした研究でも、学校外の社会は彼らに苦悩や葛藤をもたらす「普遍的な韓国社会の価値」や「主流の価値」に満ちているという語り引用されており（ホ・チャンス 2023；キム・ヨンファ 2014）、代案学校と「主流の」社会に対する二分法的な認識が描出されている。

こうした一連の研究は、「試験能力主義」に代表されるような「主流」の価値観の弊害に対する、代案教育の挑戦および生徒の個人的経験を浮き彫りにした点で意義がある。しかしながら、こうした議論の前提となる「代案教育／主流」という二分法的な構図が現在変化を目前にしていることを指摘したい。その理由は、次節で詳述するように、近年教育行政の主導によって、公教育や大学入試制度が定性化を志向していることにある。

定性化、すなわち従来オルタナティブの側にあったものが公教育に取り入れられている状況を、本稿では代案教育と公教育の接近と捉える。そのうえで、次のような新たな問題が浮上していると考えられる。それは、公教育が代案教育に取って代わる可能性はあるのか、それが不可能ならば代案教育のアイデンティティや意義はどこに求められるのかという問題である。その問いに迫るべく、次項では定性化に向かう公教育や入試制度と、それに対する社会的な不安について詳述する。

---

<sup>2</sup> 1997年にタイから始まったアジア通貨危機は、韓国における通貨ウォンの暴落、外貨不足、企業倒産の増加、失業者の急増など深刻な経済的被害をもたらした。

## 1.2.多様化する入試制度と公正性という壁

韓国の大学入試選考は、主に推薦入試の「随時募集（수시）」と一般入試の「定時募集（정시）」の二つに分けられる。前者は主に、高校での指導要録である「学生生活記録簿」（以下、学生簿と呼ぶ）を中心とした選考で、後者は主に日本の大学入学共通テストに相当する「大学修学能力試験」（以下、修学能力試験と呼ぶ）を中心とした選考である。随時募集は 2000 年代半ばから急激に拡大し<sup>3</sup>、その割合は 2026 年度には 79.9%に至る（教育部 2024b）。一元的な入学試験制度を脱しより多様な側面からの選抜を志向するようになったという点では、こうした傾向を肯定的に見ることもできる。

区分	選抜類型		主要選抜要素	2026年度 の割合
随時募集	学生簿 中心	学生簿 (教科)	教科成績など	45.1%
		学生簿 (総合)	教科、非教科、面接など (自己紹介書、推薦書を活用)	23.6%
	論述中心		論述など	3.6%
	実技中心		実技など	6.3%
	その他			1.3%
定時募集	修能中心		修能など	18.5%
	実技中心		実技など	1.4%
	その他			0.2%

表 1 韓国の大学入試選考の類型  
(教育部『2026 年度大学入学選考施行計画発表』に基づき筆者作成)

しかしながら、実のところ近年の韓国では随時募集に対する不信感が社会的に蔓延している。松本（2016）は、特に「学生簿総合選考」、つまり高校の成績や修学能力試験の結果を参考にしない<sup>4</sup>定性的な選抜枠の信頼性・公正性に対する懸念が高まっているとし、その原因を次の 3 つに特定している。第一に書類や面接を通し合否を判断する「入学査定監（Admission Officer）」の専門性に対する懐疑、第二に選抜基準の不透明さ、第三に学生簿自体の信頼性に対する疑念である。つまり「学生簿総合選考」では、合否の判断基準やプロセスがブラックボックス化されているのだ。また、合否の判断を行う入学査定監や、学生簿を書いた高校教師の主観が評価に与え得る影響も指摘されている（松本 2016）。さらに柳（2022）の過去約 30 年分の社説分析によれば、近年は学力選抜試験の方が公正だと再評価する動きが生じており、「入試をめぐる韓国のマスメディア言説はいわば定量的選抜と定性的選抜の間で「振り子」のように揺れている」という。

大学入試の定性化と公正性が軋轢を生む一方、その前段階である高校教育は定性化に

<sup>3</sup> 随時募集が導入されたのは 1996 年度だが、2003 年頃まで定員数が非常に限定的だった（柳 2022）。

<sup>4</sup> 例外として、医学部や薬学部、一部の上位大学では、修学能力試験の点数が一定基準を上回る志望者にもみ出願資格を認める場合がある。

向け大きく舵を切り始めている。その象徴的な取り組みが、2025年以降入学の生徒を対象に全国の一般高校で実施が決定されている「高校学点制」である。この制度では、大学の履修制度と同様に生徒が自ら科目を選択し、単位を取得することで卒業要件を満たす。従来の高校教育では、画一的なカリキュラムが全生徒に一律で課され、特定の時間割に基づいて進行することが一般的だった。しかし、高校学点制では、生徒が興味や進路に応じて履修科目を自由に選択し、自らの学びを主体的に設計することができる。例えば特定の分野に興味がある生徒はその分野の科目を集中的に履修し、幅広い学びを志向する生徒は多様な科目を選択することが可能である。さらに、進級要件も定められたカリキュラムの完遂ではなく、単位の取得に基づくため、個々のペースで学びを進めることが可能となる。既に一部の学校では試験的にこの制度が導入されており、一定の成果を上げている（西山 2023）。これに伴い、2028年度以降の修学能力試験における評価方法や実施体系は既に大きな改編が志向されており（教育部 2023）、高校学点制により志願者が培った幅広い知識や探究力をより柔軟に評価する仕組みが整備されると期待されている。

以上の状況を踏まえると、「代案的な教育＝質的・多様／主流の教育＝量的・一元的」といった二項対立ではもはや説明できない新たな局面が到来しつつあると言える。公教育は、「公正性」という課題に直面しつつも、これまでオルタナティブ教育が実践してきた方法や価値観を取り入れている。韓国における代案教育と公教育の関係性は、相互に影響を与え合いながら、複雑さを増しているのが現状である。

本稿の目的は、こうした代案教育と公教育の接近と交錯が進む現代韓国において、代案教育が果たし得る意義を再検討することにある。本稿では、この議論を深めるために、人類学的な「監査文化」概念を分析枠組みとして活用する。その詳細については、次節で詳しく述べることにしたい。

### 1.3. 監査されるオルタナティブ

本来「監査」という語は、財務会計分野で対象の適正性や不適正性を評価する行為を指す<sup>5</sup>。一方で人類学分野では、特に1980年代以降の新自由主義の拡大に伴い、こうした監査的な手法が財務会計の範疇を超えて社会の諸領域に適用されるようになったことを問題視してきた。市場原理と効率性を重視する新自由主義的政策は、従来は市場原理と距離があった教育や医療、非営利組織などの領域にも「透明性」や「説明責任（accountability）」といった会計的な要求を持ち込み、成果や活動の数値化を伴う評価・管理を促進した。このように監査的手法が社会全体に広がり、文化的・制度的変化をもたらしている現象を、人類学者のストラザーン（2000）は批判を込めて「監査文化」と呼んでいる。

「監査文化」における監査は、評価や測定、可視化を通じて人々や組織の行動を管理・

<sup>5</sup> 例として、企業に対し監査を行う場合、業務の執行や財務状況について法令や社内規定を遵守しているか評価・報告することを意味する。

統制する側面がある。この監査は、社会の諸活動を数値やランキングといった測定可能な形式に変換し、その際の評価基準を通じて何が価値ある成果とされるかを規定する<sup>6</sup>。それにより評価基準の内面化による自己規律化が進行し、人々は監視者の存在なしに基準へ自発的に従うようになる。一見中立的に見える評価・測定・可視化という過程は、社会の諸領域を管理・統制する力学として作用するのである（中川 2010）。

韓国の教育行政もまた、この監査文化の影響を受けている。1995年に金泳三政権が掲げた、通称「5.31 教育改革方案」は新自由主義的原則を教育分野に導入し、その体制は現在も維持されている（二階 2020）。一方で、前項で述べた定性的な評価体系は、こうした監査文化の価値観と緊張関係にある。監査文化が客観的な数値化を要求するのに対し、定性的な評価は曖昧さや主観的な要素を伴うためである。

この緊張関係はオルタナティブ教育においても無関係ではない。特に、オルタナティブ教育が行政の規範と衝突する問題は 1990 年代以降世界各地で確認されている（永田 2019 : 3）。その典型例の一つが、公的認証制度である。通常、公的認証を取得しようとするオルタナティブスクールに対し、行政は学校運営の基準として敷地面積、設備の充実度、教員数や教員資格の有無などの画一的な条件を課す。しかし、こうした基準はしばしばオルタナティブ教育の独自性や柔軟性と衝突する。公的認証の取得が経済的支援や社会的信頼を得る契機となる一方で、規範化の圧力はオルタナティブ教育の根幹である自由を制限し得る。この点において認証は諸刃の剣であり、認可に慎重な態度を見せるオルタナティブスクールは少なくない（永田 2005 ; 吉田 2020）。

オルタナティブ教育が公的認証を受ける際、行政が定めた一元的基準への適合が求められる。この状況を監査文化の観点から捉えると、オルタナティブ教育はその価値を可視化し説明責任を果たすべき対象として、すなわち監査文化の枠組みで評価される構造に置かれている。ただし、繰り返しになるが、公的認証を得るため監査文化的な要求を全て呑めば、定性的な教育の良さは損なわれ得る。こうした緊張関係は、前項で述べた、定性的選抜の公正性に対する社会的な不信感にも通底する。つまり、定性的な要素を重視する教育実践は、監査文化のもとで受容しがたいものと見なされる一方で、こうした枠組みに完全に適合すればその本質が失われるという矛盾に直面するのである。

こうした背景を踏まえ、次節では、非認可の代案学校である堤川ガンジー学校の事例を紹介する。同校は、公的認証をあえて回避し、非認可という立場に留まることで、行政の規範化から距離を置きつつ独自の教育実践を継続している。この事例を通じて、本稿では、公教育と代案教育が接近する現代韓国において、代案教育がいかにかそのアイデンティティを維持し得るかを考察する。

## 2.対象校の概要

---

<sup>6</sup> 例として、学校の成果が標準化テストのスコアや卒業率等の数値で評価され、その結果が学校間の競争や資金配分に影響を与えるとき、学校がそれらの数値の向上に注力するようになる場合が挙げられる。

## 2.1.学校の歴史

本稿では韓国の忠清北道堤川市に位置する非認可の代案学校である堤川ガンジー学校を対象とし、教師や生徒の語りを通じて分析を行う。事例は学校のホームページや公式 YouTube チャンネル、インタビュー記事、個人ブログ、生徒が部活動として編著を行う学内誌『ガンジーIN』から収集した。

堤川ガンジー学校の起源は、1997年3月に設立された6年制の中・高等代案学校「ガンジー青少年学校」に遡る。同校は韓国国内でも早期に創設された全日制・寄宿型の代案学校であり、「韓国代案教育の代名詞」(宋 2021)や「最も代表的な代案学校の一つ」(ユン・ビョンフン 2022)と評されるように、その教育実践は代案教育運動の最前線として社会的に注目されてきた。同校が設立された1990年代末は行政が代案教育を公教育に取り入れるべく制度改革を開始した時期でもあったが、当初の認可制度は高等学校のみを対象としていた。そのため、同校の設立同年に高校部のみが認可を取得する形となった際も、中学部は非認可の立場に留まった。

転機が訪れたのは2001年のことである。慶尚南道の教育庁(日本の教育委員会に相当)が非認可である同校の中学部に対し運営中止・解散を命じ、従わない場合は高校部への財政支援を中断したうえで学校関係者に法的措置を講じると警告したのだ。その背景には、高校部の支援金が中学部の運営にも転用されていたことがあった。この事態以降しばらく同校と行政は冷戦状態にあったが、最終的に学校側は行政の言い分を呑み、忠清北道堤川市に中学部を移転させた。2005年には校名を「堤川ガンジー学校」と改め、翌年には高校部を再設置した6年制へと運営体制を変更した。それから現在に至るまで、同校は非認可の立場を維持している(金 2019)。

同校が非認可を維持している背景には、三代目校長のイ・ビョンゴンが指摘する認可基準の制約がある。彼が具体的に挙げるのは、教員免許を持つ教師が全体の3分の2以上でなければならないという要件や、教育行政情報システムの導入、公教育カリキュラムの一部義務化などである<sup>7</sup>。これらの基準に従うことで学校独自の教育実践が制約される懸念があるため、堤川ガンジー学校は認可を受けずに独自の教育理念と柔軟な運営方針を維持する道を選んでいる。

## 2.2.教育理念と概要

堤川ガンジー学校の名称からも明らかなように、インド独立運動を率いたマハトマ・ガンジーの思想は同校における重要な教育哲学の一つである。例えば堤川ガンジー学校のホームページには学校の特徴として「ガンジーの不服従精神で、既存の教育に順応せず、新しい文化を作るために努力する」と記載されている。

これに加え、堤川ガンジー学校では次の二つの教育理念を掲げている。一つは「愛と

---

<sup>7</sup> スワンニュース 2023「堤川ガンジー学校校長イ・ビョンゴンに会う」5月15日  
<https://www.swn.kr/2023/05/15/인터뷰-제천간디학교-교장-이병곤을-만나/> 2025年1月12日最終閲覧。

自発性」で、これは教師と生徒間の全人的・霊的な交流に基づいた愛情深い関係を通じて生徒の自発性が喚起されるという理念である。二つ目は「共同体教育」であり、相互に尊重し、協力し、時には衝突しながら共同体的な生活を送る経験を通じて、より良い社会を主体的に構築する力が養われるという理念である。

学校は堤川市の中心部から車で1時間ほどの山間部にあり、豊かな自然に囲まれている。公共交通機関でのアクセスは限定的だが、学校には寮が併設されており、生徒の多くは親元を離れて寝食を共にしている。

2025年度の新入生募集要項を参照すると、生徒数は一学年あたり約20名で、毎年10月頃に入学選考が実施されている。選考過程は書類審査を行う一次選考と二泊三日の面接・キャンプを行う二次審査が設けられており、知識問題を問う形式の筆記試験は実施されない。また、基本的に途中学年からの編入は受け付けておらず、学校に通うには初年度から入学する必要がある。

カリキュラムの特徴としては、授業が必須科目と選択科目に分かれていること、既定の授業以外に学生自ら企画・立案した授業の開講が可能であることが挙げられる。また、評定は「履修／未履修」の二段階のみであり、成績による段階的な評価は行われない。

以上、主に公式ホームページを基に堤川ガンジー学校の概要を述べた。このような特徴を背景に、次節では同校の生活世界を生徒や教師の視点から掘り下げ、教育実践の具体的な文脈を描出する。

### 3.事例

#### 3.1「学習の公園」

まず、堤川ガンジー学校において生徒たちの自発性が顕著に表れた場面として、校則の「白紙化」に始まる一連の事例を紹介する。

校則の白紙化とは、文字通り学校における規則の撤廃を意味し、「規則のない生活を直接感じて」みようという趣旨で2016年に始まった(パク・ウジェ&イ・ジェヒョン 2017)。生徒が執筆・編集を行う学内誌『ガンジーIN』の2017年夏号には、白紙化により生じた影響を生徒たちにインタビューした記事が掲載されている。その中で特に否定的な影響として紙幅を割かれていたのは、従来禁止されていたスマートフォンの使用時間が大幅に増えた結果、生徒同士のコミュニケーションが減少したという問題である。

しかしながら興味深いことに、この問題への対処もまた生徒たち自身から生じている。例えば、5年生(高校2年生に相当)のキム・ジミンは、学校内の売店の収益を使ってビリヤード台を設置する計画を立てた。もともと売店は学校の隣にしかなく、寮に住む生徒たちにとっては遠かったため、深夜に空腹を感じた生徒がこっそり売店へ行くことが多くあった。そこでジミンは教師と相談し、新たに両近くに売店を立ち上げた。

収益金をどのように使うかというインタビュアーの質問に対し、ジミンは「個人収入を差し引いた残りの収益金でビリヤード台を買って設置する」とし、「最近生徒たちがあまりにも携帯電話ばかり触っているから、少しでも電子機器と離れて、余暇の時間を楽しく過ごしてほしいんだ」と述べている(イ・ソンミン 2017)。

同様に、5年生のイ・ハンスルも、生徒間の交流を増やす目的で学校内にカラオケルームを設置しようと計画した。2017年秋号の『ガンジーIN』でハンスルは、コミュニケーションの減少への対策として、電子機器の使用を制限するなどの規制を設けるのではなく生徒自身が電子機器から離れられる環境を整えるべきだと考え、複数人で楽しめる娯楽としてカラオケの導入を思いついたと述べている(イ・ハンスル 2017a)。資金が限られている中で、彼は地元のフリーマーケットに出店して収益をカラオケ設置費用に充てたり、廃棄されたソファを再利用したり、また町内の知人からテレビを寄付してもらうなどの工夫を凝らして、計画を完遂した(イ・ハンスル 2017b)。

ハンスルはまた、次のように述べている。

このプロジェクトのように、校内の問題点に代替案を提示する新しい活動は、誰でも企画できます。カラオケプロジェクトが失敗したとしても、そうした試み自体に素晴らしい価値があります。生徒たち自身の力で問題を解決し、文化を形成していきけるということを伝えたいです(イ・ハンスル 2017b)。

彼の「失敗したとしても、そのような試み自体に素晴らしい価値があります」という言葉は、白紙化そのものにも当てはまると言えるだろう。そもそも白紙化は、旧来の校則に変革をもたらそうとする生徒たちの創発的なアイデアによるものであった。白紙化にせよ、そこから生じたコミュニケーション不足を解決しようとする提案にせよ、そこには既存の学校の在り方をより良くしようとする生徒たちの意図が存在している。

こうした生徒の自発的な取り組みを許容する学校環境は、先述した「愛と自発性」という教育理念からも読み取れる。それに加えて、ホームページの「ガンジー紹介」というページに掲載されている以下の言葉を紹介したい。

学校は、カリキュラムを組織し、伝達する主体ではありません。そこは興味深い「学習の公園」でなければならず、学びのきっかけが生活全体の中に染み込むように再構成する必要があります<sup>8</sup>。

堤川ガンジー学校において、学びとは講義形式の授業で先生から教示されるものではなく、学校生活全体の中で得られるものと考えられている。それは例えば、授業の運営方式にも表れている。「作業場」という履修必須の授業はその一例である。

次に引用する生徒のハハンは、この授業の一環として農場作業場を担当している。彼の担う業務の一つは、学校に設置されたバイオトイレの管理であり、溜まった排泄物を校庭に放置して発酵させ、堆肥にする作業を含む。その排泄物は、校庭で放し飼いをしている豚が食べることもあるという。

---

<sup>8</sup> 堤川ガンジー学校ホームページ「ガンジー紹介」<http://gandhischool.org/학교소개/간디소개> 2025年1月13日最終閲覧。

僕らが育てた豚たち。悲しいけど捕まえて食べたりもする。[……] 僕たちは食物を食べて、その食物が便になり、その便は豚が食べ、その豚を私たちが食べて、また便をして……。自然は循環するというを自然に学ぶ (チョ・ハハン 2013)。

また、彼は仲間と汗を流しながら作業に没頭する体験を振り返り、「労働を通じて楽しさを探すこと、学校で夢見る労作教育がこういうものではないかと考えてみる。誰かの言葉で知るのではなく、身体で感じる学び」とも述べている (チョ・ハハン 2013)。

このように「学習の公園」としての堤川ガンジー学校における学びは、授業の内外を問わず学校の生活世界のいたるところに契機を潜ませていると言える。

### 3.2.信じて待つという実践知

一方で、堤川ガンジー学校の教育には成果を測る客観的な指標がないため、教師や保護者の抱える不安が一つの課題となる。試験で習熟度を確認する授業形態とは異なり、学習の達成度や生徒の成長が目に見えにくいためだ。三代目校長のイ・ビョンゴンは次のように述べている。

私が自由を与えさえすれば、子どもたちは無事に成長するだろうか。もし仕事が上手くいかなかったらどうしよう？先生という立場の者が、生徒の重要な発達期を何も教えず無責任に放置しているだけだったら？[……] 正解のない曖昧な瞬間を身一つで耐えなければならない。マニュアルなどは通じない (イ・ビョンゴン 2023)。

同様の不安は保護者の間にも広がる。堤川ガンジー学校の教師・生徒・保護者が執筆したエッセイ集『揺れながら咲く花、ガンジー学校』には、「私たちのほとんどは確信と不安の入り混じった状態の中で生きている」や「私の目に映る子どもはたまに無気力で、世の中を生き抜くにはあまりに足りない、あるいはあまりにも自分勝手だった」などの声が多数記されている (カン・スドル 2013 ; キム・グンヒ 2013)。このような不安に対し、イ・ビョンゴンが保護者に提案するのは、「とても深い愛情が込められた無関心」だ。

『とても深い愛情が込められた無関心』が必要なのです。本当に大変ですが、愛情を持って見守りながら子供たちが呼吸できる空間を用意してあげるのが親の役割だと思います。[……] そうしてこそ、子どもの自ら生きる力が生まれるのです<sup>9</sup>。

しかし、ただ不安を抑えて待つよう説得するだけではなく、保護者も学校の生活世界

---

<sup>9</sup> ハンギョレ S 2021 「“深い愛情の込められた無関心が必要です、子どもの教育には”」 9月18日 <https://www.hani.co.kr/arti/society/schooling/1012208.html> 2024年6月13日最終閲覧。

に主体的に関与し、生徒と共にその価値を理解するプロセスが重要視されている点を強調したい。例えば学校施設を整備する「堤川ガンジー学校空間生産委員会」、食品や工芸品を販売し売上を学校に寄付する「堤川ガンジー学校奨学会」など、経済的・物質的側面から保護者が学校運営に携わり、貢献する場が作られている。こうした活動を通じて保護者同士が連帯し、彼らもまた学校の一員として生活世界の内部から教育の価値を理解するようになるのだ。その一例として、以下に保護者による語りを二つ引用する。

ガンジー学校には子どもと一緒に両親が入学するという話がある。両親の成長が伴ってこそ子どもの成長が完全に担保されるためだ。[……] 両親同士で楽しく遊びながら家族のように過ごしていると、いつのまにか同級の子どもたちが我が子と同じく見え始め、家族として子どもたちの問題を共に悩むようになる(キム・ユナ 2013)。

子どもを親元から送り出す方法、子どもと適度な距離を置いて待つ方法、私と違う文化を持つ子どもをありのまま認める方法などをガンジーで学んだ。一緒に浮かれ、のびのびと過ごし、試行錯誤を繰り返し、激しく悩んで初めて自由になった。[……] 私も授業料を払わない新入生だったわけだ(キム・グンヒ 2013)。

このように堤川ガンジー学校では、教師・生徒・保護者が一体となって教育の生活世界を築き上げていると言える。保護者たちは、学校への参与を通じて、子どもと同時に自らも成長する過程を経る。それによって彼らは教育の価値を実感できるようになるのである。

### 3.3.保たれる翻訳不可能性

しかしながら、生徒自身も堤川ガンジー学校における学びの意義を直感的に理解できない場合もある。その典型的な例が、卒業後の社会生活の中で、学校での学びが実生活に役立たないと感じられる瞬間である。2019年に卒業したイ・ジェヒョンは自身のブログで次のように記述している。

そこで何を学ぶのかと訊かれることがある。[……] 私は毎回ごまかしたりする。ベートルズを歌うことが学びになるというのを理解できず、私もそれが認めるに足る「適切な」学びなのか確信できないからだ。町内の〔一般学校に通う〕友人らの勉強は階段のように続いている。高校1年生の国語の次に難度が上がった高校2年生の国語を勉強する、認められる学びの過程とはおそらくそういうものだ<sup>10</sup>。

(括弧内は筆者註)

<sup>10</sup> イ・ジェヒョン 2023 「[僕のガンジー学校日誌] ⑤答えられないから」 <https://ecosophialab.com/나의-간디학교-일지-⑤-답을-할-수-없기에/> 2025年1月13日最終閲覧。

この発言は、一般的な学校教育において「階段状」に進む学びが外部から認められるものであるのに対し、ガンジー学校の学びはそのような外部評価の枠組みから逸脱していることを示している。一般学校では、單元ごとの具体的な習得目標が明示され、その達成度がテストなどで測定される。一方、堤川ガンジー学校では、例えば「愛と自発性」といった理念がどの程度実現されているのか、客観的な評価基準は存在しない。これにより、生徒自身がその学びを価値あるものと認識することが難しい場面も生じるのだ。

さらに、一般学校では「階段」の最上段に大学入試や就職といった具体的な目標が据えられているが、堤川ガンジー学校では卒業後の進路や社会的評価が必ずしも学びと直結していない。このため、学校外の視点では学びの価値が不明瞭に映ることがある。

このように、堤川ガンジー学校の学びは一般的な学校教育の枠組みからは理解しがたいものとして存在しているが、その背景には、資本主義社会における効率性や実用性を価値の基準としない教育観があることが指摘できる。校長イ・ビョンゴンは次のように語り、学校の教育方針を説明している。

私たちは資本主義社会に必要な労働力を備えるために子どもたちを育てるのではなく、子どもたちの発達水準と好奇心に合わせて教育を提供しています。それが本当の勉強なのです<sup>11</sup>。

ここで語られる「本当の勉強」とは、一般社会の効率性や生産性を目的とする教育とは異なり、生徒一人ひとりの内面や主体性を重視した学びである。この方針は、堤川ガンジー学校の教育が外部の評価基準や実用性に縛られない独自の価値を追求していることを表している。

さらに、次に引用する彼の語りからも、外部の価値観による評価を拒絶する態度が読み取れる。彼は教育の成果が外部に理解される必要性を否定し、卒業生たちに次のように語りかけている。

他者に心を許すこと、協力しプロジェクトを完遂すること、揉め事の当事者を慰めながら事態が悪化しないよう見守ること、悪いことをしたら先に謝ること。今まで生きてきて、そうした重要な能力には不思議と資格がなかった。だから、国家公認の学歴がなくても萎縮したり不安を感じたりせず、堂々と人生を広げていきなさい。  
[……]君たちは既に、人生を導く無形の資格証を持っている(イ・ビョンゴン 2020)。

このような語りは、堤川ガンジー学校の教育が、卒業後の職業的成功や社会的地位の向上といった外的な目標に向けたものではないことを示している。卒業生ハンギルの語

---

<sup>11</sup> ハンギョレ S 2021 「“深い愛情の込められた無関心が必要です、子どもの教育には”」 9月18日 <https://www.hani.co.kr/arti/society/schooling/1012208.html> 2024年6月13日最終閲覧。

りは、この教育がいかにかに生徒自身の「内面の土」を豊かにすることを重視しているかを象徴している。彼女は学校の学びを次のように表現している。

公教育では何か一つ作物を作るときなんか、トマトを売れるように大きく甘く上手に育てるのが目標だとすれば、代案教育の場合は、どんな作物であれ、自分が今後植えたものが良く育つような土を作るの〔が目標〕ではないかと思いました<sup>12</sup>。

(括弧内は筆者註)

ここでは、ガンジー学校の学びが「商品性」を追求する教育ではなく、生徒一人ひとりが主体的に生きるための「土壌」を作る教育であることが示されている。これは、前述した外部評価の枠組みから逸脱した学びの意義を、卒業生自身が主体的に再解釈し、肯定している例といえる。

このように、堤川ガンジー学校の学びは、資本主義的な価値観や一般的な教育評価の枠組みでは理解しえない、すなわち翻訳不可能なものだと言える。それは、生徒一人ひとりの内面や主体性を重んじる学びの在り方が、外部の評価基準や効率性を前提とする価値観とは根本的に異なるためだ。堤川ガンジー学校は、その翻訳不可能性を保ちつつ、生徒個々の「土」を豊かにするという独自の教育的価値を涵養しているのである。

#### 4. 考察

堤川ガンジー学校の事例は、代案教育が公教育と接近する中で、いかに独自の意義を保持し得るか、またその存在が主流社会に対してどのような問いを投げかけるかを示唆している。本節では、以下の三つの視点から議論を展開する。

第一に、堤川ガンジー学校はホリスティック (wholistic) な教育観を基盤とし、生活全体を通じた学びを重視している。この教育観は、生徒の主体性や感情、身体、精神の調和的成長を目指し、「3.1 『学習の公園』」で紹介した事例にも表れている。このような全人的アプローチは、1990年代以降のオルタナティブ教育に広く見られる特徴であり(永田 2005:35-36)、従来の能力育成を超えた学びのあり方を提示している。しかし、この学びは定量的な評価を拒む性質を持つため、成果を数値や標準化で説明することが困難である(小森・東原 2006:115-116)。その結果、堤川ガンジー学校の教育成果は一般社会の評価基準では「翻訳不可能」となり、これが「3.2 信じて待つという実践知」で述べた保護者や教師の不安の一因となる。一方で、この翻訳不可能性こそが、学校外の価値観から独立性を保つ基盤でもある。

第二に、同校が非認可の地位を選択していることは、監査文化を拒絶する戦略として位置づけられる。監査文化とは、成果や価値を数値化し、評価基準を通じて管理・統制

---

<sup>12</sup> 代案学校 堤川ガンジー学校「代案学校の卒業生は何をして生きる？堤川ガンジー学校卒業後の話」 <https://youtu.be/R7fFQiSzpvY?si=vZ3gsyOyIoFPDuTP> 2025年1月20日最終閲覧。

する枠組みであり、新自由主義的教育観と密接に関連している（ストラザーン 2000；中川 2010）。堤川ガンジー学校が公的認証を避けることによって行政の規範化を回避し、教育の独自性を維持している点は注目に値する。「信じて待つ」という保護者や教師の態度は、監査文化が求める即時的かつ客観的なフィードバックとは対極にある。また、保護者が学校生活に主体的に関与する仕組みは、監査の枠組みを超えた教育価値の共有を促すものである。

第三に、堤川ガンジー学校の教育は、主流社会が持つ試験能力主義や効率性重視の価値観に対して批判的な問いかけを行う「他者」として機能している。永田（2005:38-40）が指摘するように、オルタナティブ教育はメインストリームに相対化を促すセルフ・リフレクティブな作用を持つ。同校においては、教育成果の「翻訳不可能性」を維持することで、主流社会の一元的価値観を問い直す契機を提供している。たとえば、卒業生ハングルの「土壌を作る」という比喩的表現は、効率性や成果主義に基づく教育観を相対化し、異なる視座を示唆している。また、吉田（2022）が論じるように、オルタナティブ教育の意義は正解を提示することではなく、多数派の価値観に対する持続的な「問いかけ」にある。同校の教育実践は、定性的な学びの価値を体現し続けることで、教育的意義を示しているといえる。

以上より、堤川ガンジー学校の事例は、公教育と代案教育の接近が進む現代韓国において、代案教育が主流社会と相互作用しつつも独自性を保持し、社会に新たな視点を提供する可能性を示唆している。このことから、代案教育が「問いかける他者」として果たす役割の重要性が改めて浮き彫りになった。

## おわりに

本稿では、堤川ガンジー学校を事例として、代案教育が公教育と接近する状況下で持つ意義を考察した。同校の教育実践は、外部からの監査を拒絶し、ホリスティックな教育観を維持することで、「翻訳不可能」な価値を守り続けている。その独自性は主流社会に対する批判的な問いかけを可能にし、教育全体のあり方を再考する機会を提供している。この「問いかける他者」としての役割は、単なる代案教育の枠を超え、教育全体の進化を促す原動力となり得る。

一方、高校学点制や定性的選抜といった取り組みは、オルタナティブ教育が担ってきた主体的かつ多様な学びを公教育に取り込む試みであるが、監査文化がもたらす「測定可能性」の要求と本質的に相容れない矛盾を抱えている。このようなアンビバレンスの中で、堤川ガンジー学校のようなオルタナティブ教育は、監査文化の影響を受けない領域を守りつつ、社会的な問いを投げかけ続ける重要な存在であり続けるだろう。

今後、公教育と代案教育の接近が進む中で、後者がどのように発展していくか注視する必要がある。教育の多様性が求められる現代において、このようなオルタナティブな取り組みは、教育全体の変革に寄与する可能性を秘めているといえる。

## 参考文献

(日本語)

- 金泰勲 2019 「韓国のオルタナティブ・スクール（「代案学校」）：子どもの学習権をめぐるガンディー学校のチャレンジ」永田佳之編『変容する世界と日本のオルタナティブ教育——生を優先する多様性の方へ』世織書房.
- 金東光 2016 「韓国高等教育における公正性の問題について：「三不」政策を手掛りに」『社会環境論究』8: 21-33.
- ショア, C.・ライト, S. 2000 「威圧的なアカウンタビリティ：高等教育内における監査文化の興隆」M. ストラザーン編『監査文化の人類学』丹羽充・谷憲一・上村淳志ほか訳 水声社.
- ストラザーン, M. 2000 『監査文化の人類学』丹羽充・谷憲一・上村淳志ほか訳 水声社. (Strathern, M. *Audit Cultures: Anthropological Studies in Accountability, Ethics and the Academy*. Routledge.)
- 宋美蘭 2021 『韓国のオルタナティブスクール——子どもの生き方を支える「多様な学びの保障」へ』明石書店.
- 高橋史朗 1996 「ホリスティック教育論の基本的観点についての一考察」『明星大学教育学研究紀要』11: 87-97.
- 田中光晴 2009 「韓国における私教育費問題と政府の対応に関する研究：教育政策の分析を通して」『比較教育学研究』38: 87-107.
- 鄭廣姫 2019 「韓国における「代案教育」の展開と関連政策」永田佳之編『変容する世界と日本のオルタナティブ教育：生を優先する多様性の方へ』世織書房.
- 中川敏 2010 「失敗した比較：監査と類化」『国立民族学博物館調査報告』90: 227-246.
- 永田佳之 2005 『オルタナティブ教育——国際比較に見る21世紀の学校づくり』新評論.
- 南部広孝・西山喜満主 2023 「東アジア諸国・地域における大学入学者選抜改革に関する考察：高校教育段階での学習・活動成果の活用を中心に」『京都大学大学院教育学研究科紀要』69: 69-93.
- 二階宏之 2020 「第1章 韓国：大学の国際化と評価への期待と葛藤」佐藤幸人編『東アジアの人文・社会科学における研究評価——制度とその変化』日本貿易振興機構アジア経済研究所.
- 西山喜満主 2023 「韓国の高等学校教育改革に関する一考察：「高校学点制」の導入に焦点をあてて」『地域連携教育研究』8: 71-83.
- 松本麻人 2016 「韓国における大学入試改革：新たな「学力」の評価への挑戦」『比較教育学研究』53: 28-39.
- 吉田敦彦 2022 『教育のオルタナティブ——〈ホリスティック教育／ケア〉研究のために』せせらぎ出版.

柳煌碩 2022 「韓国における入試批判の変化と「定量的選抜」への回帰：1990年から2021年までの社説分析を通じて」『東アジア教育研究』14: 1-15.

(韓国語)

イ・ウンシル&カン・ヨンテク 2011 「キリスト教代案学校の卒業生たちが認識する教育成果に対する質的研究」『キリスト教教育論集』26: 481-515.

イ・ハンスル 2017a 「歌わなければ～生きていないようなものだ～」『ガンジーIN 2017 秋号』41-42.

—— 2017b 「僕の名前はコナン、探偵さ」『ガンジーIN 2017 冬号』46-50.

イ・ビョンゴン 2020 「堂々とした無学歴者を能力主義社会に送り」<https://www.hani.co.kr/arti/opinion/column/974503.html> 2024年11月30日最終閲覧.

—— 2022 「人生の動く方向がまさに進路だ」<https://www.hani.co.kr/arti/opinion/column/1067578.html> 2024年11月30日最終閲覧.

—— 2023 「遊びながらの研修がお互いの力になるなんて」<https://www.hani.co.kr/arti/opinion/column/1086694.html> 2024年11月30日最終閲覧.

イ・ソンミン 2017 「空腹の私たちに一筋の光のような」『ガンジーIN 2017 年夏号』15-19.

イ・ヒョンジュ&チョン・ハラム 2022 「大学入試制度の公正な競争に関する体系的文献考察」『教育社会学研究』32 (3) : 209-239.

ウ・ミョンスク&ナム・ウンミョン 2021 「公平性の原則としての能力主義と不平等認識：韓国と日本の比較」『アジア研究』64(1): 201-244.

カン・スドル 2013 「代案教育と両親：消費者と革新家の間」『揺れながら咲く花：ガンジー学校』工夫出版.

キム・グンヒ 2013 「子どもによって卒業証書が違います」『揺れながら咲く花：ガンジー学校』工夫出版.

キム・ドンチュン 2022 『試験能力主義：韓国型能力主義がいかに不平等を強化するか』チャンピ.

キム・ユナ 2013 「愛と自発性は学校のホームページにだけあるんでしょうか？」『揺れながら咲く花：ガンジー学校』工夫出版.

キム・ヨンファ 2014 「代案学校の卒業生はどんな人生を生きているのか？」『教育社会学研究』24 (3) : 63-97.

高大新聞 2022 「堤川の山奥で新しい教育の風をおこす」5月15日.

チョ・ウジョン 2022 「代案学校の生徒たちのライフコースに対する教育的理解」威徳大学大学院教育学科教育コンサルティング専攻, 博士論文.

チョ・ハハン 2013 「フンをすくって豚を育てる学校」『揺れながら咲く花：ガンジー学校』工夫出版.

パク・ウジェ&イ・ジェヒョン 2017 「列車が出発します。次の駅は（？）です」『ガンジー-IN 2017 夏号』20-25.

パク・ギョン 2023 「IMF 外為危機前後の韓国社会の公正性談論の変化：ビッグデータ技法を活用したメディア談論分析」『社会科学研究』62(3): 205-226.

ハム・ヨンジュ 2015 「キリスト教代案学校卒業生たちの教育成果に対する質的研究：ジレンマナラティブの分析を中心に」『神学と実践』47: 459-483.

ホ・チャンス 2023 「新緑代案学校の教育課程に対する卒業生の経験理解」『学習者中心教科教育研究』23 (24) : 253-272.

ユン・ビョンフン 2020 「‘誇らしく不適応する’：ガンジー高等学校での真正性の遂行と二重拘束」ソウル大学校大学院社会学科，修士論文.

### (官公庁の資料)

教育部 2023 『2028 入試から 国語・数学・社会・科学 選択科目のない統合型の修学能力試験、内申 5 等級体制確定』<https://www.moe.go.kr/boardCnts/viewRenew.do?boardID=294&boardSeq=97551&lev=0&searchType=null&statusYN=W&page=1&s=moe&m=020402&opType=N> 2025 年 1 月 8 日最終閲覧.

—— 2024a 『2023 年小中校私教育費調査結果』<https://www.moe.go.kr/boardCnts/viewRenew.do?boardID=294&boardSeq=98364&lev=0&searchType=null&statusYN=W&page=1&s=moe&m=020402&opType=N> 2025 年 1 月 6 日最終閲覧.

—— 2024b 『2026 年度大学入学選考施行計画発表』<https://www.moe.go.kr/boardCnts/viewRenew.do?boardID=294&boardSeq=98803&lev=0&m=020402> 2025 年 1 月 7 日最終閲覧.